長野大学紀要　第21巻第4号　33—39頁（401—407頁）2000

辻邦生のパリ滞在(10)

Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木　涇*
SASAKI Thoru

10　啓示（承前）

10—2　8月24日のアテネ

前回の「10—1回想から」では辻邦生自身の内部で整理されたギリシア体験の本質的な部分が表現されたものを見た。当然のこととして『パリの手記』にそって辻邦生のギリシア体験を見なければならない。それをすることで彼の思索過程と感得したものが、鮮明な印象として直接に把握できる。ではその手記ではどんなことが書かれているだろうか。

まず、1959年8月20日の日記、つまり旅立ちの前夜の日記に目をとめておきたい。辻邦生は佐保子夫人の翻訳の仕事を数日前から手伝っていた。自分の仕事でもないのに関わらず、「書く」仕事が喜びを与えることを実感し、その作業と平行して旅の準備をした。

訳稿の註を入れ、訂正をし、ビブリオテーク・ナシオナルで辞書を引き、午後5時リュ・アムロに切符をとりにゆき、リュ・ド・セーヌで旅行の食糧を買い、夜はまた訳の訂正。十時半だが、暑気はまだ去らない。Aは弁当を作り、旅行準備を終える。いよいよながいこと待っていたギリシアの旅行に立つ。心がある巨大にふくれあがる感動でみたされる。／Aは僕の上衣をつくろい、アイロンをかけ、針道具をしまい、訳稿もトランクに押しこんだ。ようやく気ぜわしい一日の終りに、旅立つ前の落着きが訪れる。辛く煮た牛肉をAは最後にビニール箱につめる。これでいよいよ旅の支度は終った。ラジオはシューマンのピアノ曲をやっている。夜気が涼しくなりはじめる。壁から地図をはがす。このギリシアとイタリアの地図を一年間ながめてきたわけだ。
（8月20日、『パリの手記Ⅲ　街そして形象』河出書房新社、1973）

旅に思いを寄せている場面がこの後に続くのであるが、それを次に引用する。辻邦生はエッセーで、どきどき「旅立ちの前の歓喜」をたとえとして登場させる。このときの彼自身の歓喜をぜひ見ておきたいからだ。

このような夜、パリの初秋の静けさのなかで考え、旅を思うのは、ほとんど稀有の倖せにはちがいない。僕は新しい、この旅の奥に、小さく、まだ僕にとって小さく遠く光っている世界に、深く、心をこめて、近づき、達しなければならない。……（略）……書くこと、そして新しい世界に旅立つこと、そこにこの遠く光るものの物語る意味がある。それは青い光だ。それは空かもしれず、海かもしれない。そこに達し、そこから帰るとき、僕は真に「書く人」として心をこめて、自分の世界を強く生きることができるだろう。なぜなら、それは僕の精神の果、大きな閉ざされた世界の果であり、そこから僕は世界のうちに充ちる人として帰るだろうからだ。　（同）

予感を覚える旅立ちの前夜である。いや予感というより確信といった方が相応しい。ギリシア体

* 教授

験をすでに起こるべくことがらとして確信しているような書き方である。そして来し方を振り返って自らのパリ滞在についての思いを反芻しながら、新たな旅立ちを意味づける。

この日記を書きはじめたころから、まだ一年とすこししかたっていない。しかし多くの冒険とドラマを経てきた。それは何かのためにあったのではなかった。それらは、つねに、そこで、十全に生きられて、はじめて意味をもち、僕のものとなった。待っていてもならず、中途半端に生きてもならず、ただ生きること、すべてが（苦痛も失敗も含めてすべてが）僕を豊かにしてくれるものとして、積極的に生きねばならぬ。人生において成功、悦楽の面に地ならしをするような態度は、人生のすべてを見、経、豊かになるという態度と対立する。前者は自分を削り、そこに地ならし、水平化をするのだ。そうではない。そちら側に自分を右へならえをさせてはならない。事情は全く反対なのだ。それは自分の魂に関する問題として、そこにすべてが帰ってくるのだ。自分を高めること、すべてをみること、そこに僕の新しい世界がある。しかし一ヶ月に近い旅が、まず僕の前にある。これをどう表わしてよいか。素朴にいって、分からない。ふくれあがるよろこび、フランスへ向け、旅立ったときのよろこびと全く同じなのだ。　（同）

「僕の新しい世界」を確信しながら、旅がそこに導いてくれることも確信しているからこその「よろこび」なのだ。そしてその旅立ちの朝である。

日の出前の空。冷たい空気。出発前の数刻。十分に支度した旅立ちとは、実にいい気持だ。昨夜はねられぬままに「されること」と「すること」について考えた。存在の形はこのどちらかであり、つねに二つは対立する。僕らは「すること」を手に入れなければならない。ここしばらく自分が内から外をみながら、自分を投企して、あることを行っていた。そのような形でのみ、人に発展する。僕はそのことを旅の間に深めなければならない。　（8月21日）

本論では『パリの手記』五巻を底本にして辻邦生のパリ滞在を整理しながら論じているが、もともとこの日記は辻邦生自身が明らかにしているようにスパイラル・ノートに日々書き付けられたものである。それらにのノートは表紙に Journal（日記の意味）という表題がつけられ、ローマ数字で番号が付されている。『パリの手記』に収録された部分は、ⅠからⅣまでのノートに書かれたものである。そしてこれから見るギリシア旅行の部分は、出版された『パリの手記』では「Ⅳ　岬そして啓示」の冒頭にあり、ノートでも Journal Ⅲの冒頭にある。それというのも Journal Ⅱのノートでは空白がなくなるまで書いたからである。つまり新しいノートにギリシアが書き込まれたのだ。新たに起こることを予想しているかのごとく。

その新しいノートの最初の記述日は、8月22日であり、場所はイタリアのブリンディシ港に停泊中のギリシア船の甲板上となっている。この夜の11時にギリシアに向けてブリンディシ港を出発した。アメリカに渡るトーマス・マンの眼前には世界文学という巨大な空間があったことを想定しながら、出航する船に乗っていた辻邦生は「存在」が究極の問題であると設定する。ギリシアに渡る前の船中で自身の存在のあり方を思索し、確認する。辻邦生と同様にわれわれもこの時点で確認しておこう。

そしてその<存在>とはその全くの個性を表わし、それが普遍の高さに達するまで深化するとき、はじめて、それは人間にとって貴重な魅惑的な形となる。多くを書くということも、その一つ一つが、以上のような意味の個となりえたなら、十分に意味がある。しかし最も重要なことは、その状況のなかから、その状況を最もよく語る「個」をとりだして、この「個」にすべてを与えることである。
（8月22日、『パリの手記Ⅳ　岬そして啓示』河出書房新社、1974．以下、日付のみで特にことわりがない場合、引用はすべてこれをテクストとしている）

「この「個」にすべてを与えること」とは、普遍性を十分に染み込ませることであり、それがために正確に表現することである客観性に徹底することは排除される。だから今、辻邦生は断言する。

学問的な方法は、何らの主観的感情をまじえずに、一つ一つ、丹念に、正確に書いてゆかなければならない。しかし芸術的方法は、これとは全く異なる。その一つ、または幾つかが、僕なら僕がそこに感じたすべてを物語るように、取りあげられ、それをとりまくもっともヴィヴィドなエピソードと、それが「個」と

なるための徹底した展開をもって、語られねばならない。……（略）……しかし芸術的方法の主観性は、いわばその世界の現われる動機のようなものだ。それは伝達ではない。それはある世界の存在の表われである。この世の秩序から出、いかなる意味であろうと、そこに立ちかえることで、生命を蘇らせるそのような世界である。それは人間が人間となるための空間である。主観とはまさにその故に死の無限の体系のなかの目覚めとなる。この目覚めが客観の歪曲という冒険から、人間である徴(しる)しに高まるとき、それは客観を呼びおこすものとなる。したがって、その世界を担う「個」は「人間が人間となるための」本質的な偏愛、むしろ愛そのものによって「生れたもの」といっていいだろう。この「個」が考えうるかぎりの正確さと深さと生きいきした感動によって把えられ、造型されるならば、その時、描写の平面がこえられるのだ。描写の平面とは、この「個」に惑溺することのない状態から生れる。情緒にせよ、雰囲気にせよ、単なる「多」を漠然と感じるにすぎない。あれもこれも中途半端に集められているのだ。（8月23日）

ここに書かれている「死の無限の体系」とは何か。それは人間の生死と関わりなく、すべてが何らかの法則に従って自然の営みが行われていくことである。別な言い方をすれば、客観的に存在する現実であり、科学的認識によって理解し得る世界である。そして「主観」とは、すでに何回もふれたように、人間が現実世界を意味づける人間の意識や認識である。これを「目覚め」とすることで無味乾燥な現実世界が人間にとって有意味となる。かくして主観世界が生じたときに、実は人間の生死に関係なく存在する現実世界は初めて「客観」世界となる。これを辻邦生は「客観を呼びおこすもの」と記したのである。このように主観的であることが芸術の世界においては基本であり重要である、と確認した上でのギリシア訪問であり、ギリシア体験である。

この日はユリシーズのイタカ島を見ながら日記をつけていた。そして「アテネ・アカデミア街」と日付の下に記述された8月24日の日記をこれから見るのであるが、この日の日記には、前回の「10―1　回想から」に粟津則雄との対談で語られた内容、バスに乗りながら見つめたアクロポリスとパルテノン神殿に関する記述はない。つまり、パルテノン神殿から光が出て、体をつらぬいたというような描写はない。とにかく幾つかの部分を引用しながら、この日記の全体を見ておきたい。まず書き出しである。

アクロポリスとは何か。おそらく誰しもその定義を心のなかに用意しようとするだろう。むろんそれはそれでよい。しかしそこにはどのような説明もが到達できない何かがあるような気がする。今日の目覚めからほとんど続けさまに、僕はギリシアの自然の荒涼とした姿に驚いていたのだ。（8月24日）

この「荒涼」とした風土に意表をつかれ、「肩すかし」であったと吐露した後に続く文章は次のようになっている。

この暑熱にじりじりと灼きつけられ、岩と砂が白く乾きあがり、あるものといっては疎らに覆う灌木の埃りにまみれた姿ぐらいだ。草も木も、この灼けつく太陽に乾しあげられ、粉をふきそうに乾いた岩の間に死んでいたりするのだ。それは自然の強暴な意志が、あまりにも支配者の顔をあらわにする。（同）

ギリシアのこの日の様子をこのように描写したあと、エジプトやアラビアの砂漠と対比して、このギリシャの地が本質的に変わるものではなく、「人間の営みを拒否した＜虚無＞の空間を示している」と見なした。だが、辻邦生を圧倒するパルテノン神殿はそこにあった。だからこの厳しい自然の状態を「ギリシアの母胎」と見なすことは不可能と思えたのである。それは辻邦生自身が、一定の豊かさが、自然条件も含めて人間の存在に必要欠くべからざるものと思っていたからだ。

すなわち人間がそこに住む以上、人間にふさわしい環境でなければならないと考えていたのだ。しかしそれは全くの誤りであることを、今日のこの、アクロポリスを見た瞬間ほどに思い知らされたことはない。それはいわば一つのある歓喜をともなった理解であり、あるふるえるような感動であった。しかしその瞬間に、僕は自分が考え、自分によって把えることのできなかったある実体を確実につかんでいたのがわかった。その窮極にあるものとはこの遠く嶮しい岩山の上に端然と立つアクロポリスの姿であったのが、そしてそれが、与えられた自然の意志に抗し、人間の領域を切りひらき、「人間」をして「人間」とせしめた人間の意志を表わしているのが、僕には痛いように分かったのだった。（同）

そう、ここに「主観」の世界を見たのである。不毛の地そのものの岩山の上にそびえ立つパルテノン神殿は「人間の意志」によって造られたのであり、不毛の地であるからといって自然のままの荒涼とした状態に放置したのではなく、そこにわれら人間の領域として宣言するがごとく神殿はあったのである。つまり人間が意味ある領域としたのである、と辻邦生は確信したのだ。

それはまさしく運命に抗い運命にうちかつ姿そのものだ。そしてアクロポリスをみていると、逆にこの厳しさがなければ、あのように美しく、均整のある、典雅な、若々しい、規律ある、動い、形態をつくりあげることができなかったろうと思われた。それは実にすっきりと胸の奥底に落着いてくる納得深い実感だった。青い空に、その廃墟の丘の石柱は美しい彫りのかげをきざんで太く、しかしある軽い自然らしく優雅さで立っていた。アテナ神殿、カリアティードの美しさ、アクロポリスの長方形の姿は、いやになるほど写真でみせられたものだった。しかしそのどれもが僕にそのようなものは説明してくれなかった。あらい大理石の半透明にすらみえる乳白色にわずかに卵色、薄褐色の感じられる肌にさわったとき、これは「男」の作品であることをある共感をもって思わないわけにはゆかなかった。それはあらゆる自然に対して、人間をまもり、人間をきずきあげた文明の姿だ。自然の強暴な意志は、それによってのみ文明がつくられる、動因のようなものだと感じないわけにゆかないのだ、つまり、等しく課せられたその強暴さに打ちかって、打ちかつことのできた民族だけが、この文明を築くという仕事に進めるのかも知れない。まさしくそうにちがいなかった。それはこの永遠のドラマのもっとも見事な典型化ですらあるのだ。あの荒々しさに、あの典雅さは、なんと悪びれず、自然の匂やかな規律と明確さをもって、均衡しているのだろう。　（同）

ここまでがアクロポリスの丘のパルテノン神殿を見ての思いである。この日の日記では、ビザンチン教会やハドリアヌスやバッカスの劇場（オデオン）、アクロポリス美術館を訪れたことを簡単に記している。そして次のように書いて日記を閉じている。

今日みたアクロポリス美術館のアルカイックの立像、フロントンの見事さは忘れがたい。彩色がかなりはっきり残っているのをみておどろく。古典期のアクロポリス神殿フリーズのあの優雅な、いうにいわれぬ美しさには、身体がふるえてくる。とくにサンダルをぬぐニケ（これはニケの神殿のもの）の美しさは、言語に絶する。その衣のひだの表現の繊細さ、女体の匂やかな清々しい線、豊かな胸、片足をあげた動き、この世の極みのような美しさには、魂の底までふるえた。アクロポリスの丘のまわりには現代アテネのおよそ無意味な町々が拡がり、廃墟がその間に見られ、疎らな樹木の地肌の白褐色にみえる山が波うって、エイナ湾がかすんでいた。　（同）

この日の日記では、荒涼とした岩ばかりの大地と比較しながら、パルテノン神殿が「人間の意志」を表すものとして強調されている。不毛の地、つまり人間が生きるのに厳しい自然状況はそのまま現実の厳しさであり、その状況にあっても美を生活の秩序に据えた人間の意志が、パルテノン神殿の建立を果たしたわけだ。これまでパリでさまざまな本を読み、小説論のために思索したこと、理論として培ったもの、いわば机上の空論のごときものであったものが、それを具体的に見たのである。まさに啓示として。翌日の日記ではその意志を再確認している。文中の「レセ・フェール」はフランス語の laisser faire で「なすがままに」の意味である。

文明とは自然のままに、レセ・フェールに投げだされたものから生まれたのではなく、人間たろうとする不断の戦いから生れ、その不断の意志が保つ空間を文明の空間と呼ぶのだ。それらは与えられ、単に受けるというものではない。それは創ることであり、生きることである。それは人間を中心に緊密に結びついた求心的世界である。　（8月25日）

10―3　パルテノン神殿

翌日の8月26日から辻夫妻は、ギリシアの国内旅行を試みる。行程はアテネから西北西にあるパルナソス山の麓にあるデルフィを最初に訪れた。その翌日には海を越えた対岸のペロポネソス半島のパトラスを経て、オリンピアに行った。翌8月28日にはこの半島の中央部にあるトリポリスを拠点にしてスパルタとミストラを訪れる。29日にはアルゴスを経てナフプリオンに移るが、午後にはエピダウロスにまで足を延ばしている。そしてペロポネソス半島一周の最後の日、8月30日にはナフプリオンからサロニカに向けて夜行で発った。翌31日は、そのサロニカをゆっくり見て、再び夜

行列車でアテネに戻った。9月1日にはアテネの近郊のダフニとアゴラを見て歩き、アゴラからパルテノンを遠望したりしている。

そして翌2日には、早朝にリュカベトスに登り、アクロポリスとアテネの夜明けの様を見つめる。その部分の描写を次に引用しておく。

風は肌にしみ通って寒い。岩角に鳴り、風に吹きはらわれた雲の小片が、東の山の上に、金色に輝きはじめている。山にそった空も透明な色のままに赤い輝きを増し、山にそった線は眩しくなりはじめる。すでに遠い平地へ斜めの光になって朝日が射しこんでいるのが見えるが、この頂上もアテネもまだ光を受けていない。エイナ湾とその向いの山が赤い光に染まりだした。僕は寒い風に吹かれて最初の光が届くのを待った。空はいよいよ輝き、山の上の一帯が眩しく、いかにも輝かしい何かが向うからさし上ってくるように透明な光にみちてきた。その瞬間、山の端に、一点、絵具か何かをどろりととかすように、灼熱した赤い輝きの固まりが、小さく、素早く、溢れた。それが最初の日の光だった。僕のいる頂上の教会はばら色になり、西側の山々もばら色に輝き、海は霞のなかから青くよみがえってきた。西側の山々にそったアテネの町の一劃が、同じばら色の光に照らしだされ、やがてその光が拡がって町々の上にある影の部分がはっきりしてきたとき、その影は、僕らのたっているリュカベットスの影であることがわかった。ばら色の光が町々に拡がり、海は青く、エイナ島もサラミス島もばら色に染まって浮び上り、船の幾つかがはっきりと日を受けて見えた。アクロポリスに朝の光がさしこんだのは、それから間もなくだった。僕たちは風に吹かれて待っていた。町の西はばら色だったが、アクロポリスの一帯はまだ夜明け前のかげのなかにあった。そこに光がとどくまで、まだながいこと待たなければならないような気がした。その時、アクロポリスの神殿の石柱の並びが、そのかげのなかからふっと淡黄色に染まった。丘が一きわ高いので、暗いかげの町々に先んじて、アクロポリスだけがまっ先に光を受けたのだった。「サ・イ・エ」「サ・コマンス」と、フランスの娘たちが叫んだ。「オ、アテナ・オ・ジュ・クレール。」と別のが声をあげた。淡黄色のアクロポリスは、次第に全身を光のなかにおいた。東を向き、光を待っている典雅な素朴な神殿は、みちわたる光のなかにあった。海は青く、島々はばら色に皺を刻んでいた。アテネは白く、輝かしく、アクロポリスはふたたびこの輝きの中心に現われた。岩々のひだ、その他、乏しい青白さのなかで、そのように弱々しかったものが、光のなかで、端正な男らしい姿となりはじめる。……

（9月2日）

この日の午後の遅い時間にも辻夫妻はアクロポリスに登った。この場面で初めて日記に、アクロポリスとパルテノン神殿を間近に見た様子を書き留めている。これも重要と思われるので次に引いておく。

南斜面の、ほとんど醜いまでの灰色の岩の露出、わずかの糸杉と竜舌蘭、乾いて白い地面。アテナ神殿とプロピュライアがくっきりとその上に聳える。灰褐色と白の大理石。その柱の並び、面と線のつくる幾何学的な明晰さと悠容とした量感。とくにプロピュライアの正面の白大理石の円柱と壁面の構成が、青空に、輝きでているさまは言語を絶する。そこでは溝をもつ円柱の白さは輝く白さをもち、空の青は深くほの暗いまでの青さとなる。その、白大理石に区切られた空の青さを仰ぎながら、プロピュライアに達すると、そこからパルテノンの灰褐色の、繊細な、しかし典雅で巨大な神殿が、波立つ海のような荒削りの岩の向うに、遠くが、少し遠近法よりは余分に低くなっているような位置で、現われてくる。岩の角が荒く削られているのは、このアクロポリスの丘そのものの岩が、ここに露出しているからだ。そしてその頂きのパルテノンに向って上りになっている岩の平面の上は、いちめんに大理石やメトープや石像の破片である。アテナ神殿とエレクティオンのカリアティード。パルテノンの壮大な量感に対して、女人柱はほとんど等身大に似た大きさであり、永遠につつましく立っている。美術館が閉っているのが残念だった。風はあったが清水のように澄んでつめたく、風に吹かれているうちに魂が洗いだされてくるようだった。僕たちは丘の上から町をながめ、西の方のピレウス港と海とサラミス島の低いかげを眺めた。胸壁のそばから、はげしくそそり立つ城壁と岩々を見下したりした。すでに太陽は傾いていた。丘にのぼる前に会ったモニクとクリスティアーヌがふたたび丘にのぼってきた。プロピュライアのニケの神殿のこよなく可愛い小さな建物が、西日に照らされていた。僕らはニケの神殿の西向の石柱のそばに坐って日没をみていた。サラミス島より右、山の上に日がかかり、雲が赤く染まっていた。いつか空の青は白みわたり、プロピュライアの白大理石はばら色に染まりはじめ、石柱の間を射しつらぬく光が、斜めに、岩の地面に長いかげをなげていた。アクロポリスの丘全体がかぐわしいばら色の光のなかにあった。パルテノンの白褐色の柱は黄ばんだばら色になり、そのこよなく大きく典雅な西の側面を、いっぱいに拡げていた。日没は早かった。雲は赤く染まり、太陽はいよいよ真赤にふくらみ、アクロポリスは最後の輝かしいばら色のなかにいた。やがて真っ赤にとけるような日輪が山の上にかかる紫の雲に沈みはじめたとき、思わず

眼をかえすと、パルテノンは、一瞬、死骸のように蒼ざめ、空虚な、みすぼらしく冷たくなった廃墟に変っていた。僕はぞっとして立ち上ると、アクロポリスの丘全体がもはや冷やかな夕闇の、色のない、陰画のような空気につつまれているのに気づいた。太陽はふたたび雲をはなれ、真っ赤に輝きながら、紫の山の端に近づいていった。プロピュライアの石柱の間からモニクたちがその沈むのを見ていた。僕らはパルテノンの前の大理石柱の上に立っていた。風が急に落ち、下界のように拡がるアテネの町々から、教会の鐘がきこえてきた。しかしアクロポリスはすでに夕闇に沈んでいた。日輪は半円になり、四分の一円になり、点となって沈むと、夕映えが空に拡がった。僕らは丘を下り、モニクたちとわかれ、小さな岩山にのぼってから、町におりてきた。　（同）

今や辻邦生に啓示を与えたパルテノン神殿を愛おしむかのような描き方であり、日の光を浴びている様子に神々しさを与えている。ここに描き出された風景、つまり朝日を浴びたアクロポリスの丘とパルテノン神殿、そして黒みを帯びた青空に白く描き出された石柱、それに夕日に映える大理石の遺跡群の描写は他の作品では見られないことをつけ加えておく。長々と引用したのは再録の意味も込めてあることを承知願いたい。

10―4　シチリアの旅

9月3日に辻夫妻はアテネを離れた。アテネに隣接するピレウス港から夕方の船出であった。その時に書いた日記を見ておきたい。

この旅行ほど自分の束縛を解きはなって、単純素朴に旅行したことはなかった。旅行のなかに、ただ没頭するというだけだった。ギリシアについて僕の知るところは僅かだし、ほとんど何も知らないが、もうそんなことはどうでもよく、とくに知りたいこともなかった。ただこの異様に乾いた風土と青い空と青い海の間で、半獣神のように、生きることしか考えなかった。ギリシアの海のあの水晶のような透明さはどこからくるのか。波の底に緑を含んだ石が並ぶ海岸で、この透明な、純粋な海の水を見たときの感動。日に灼かれる灰色のパルナソス山の巨大な姿に圧倒された数刻。デルフィでの、天地が相寄って奇怪な祈禱を捧げ、玄黄の異様な幻のなかから立ちのぼるのを見たときの畏怖。オリンピアの乙女のような清浄さと静寂。ミストラの荒廃と絶望。……僕はそれらと共に生きていたし、それらのなかにほとんど無意識に自分を投げ込んでいた。すべてが、――廃墟も自然も――僕のなかにその開いた姿のままに流れこんできた。僕は乾いた人のようにそれをどくどくと飲んだのだった。しかしそれ以上のことを、何ができたろう。内から外へ、ある物事の秩序のなかに身を置いたこと、そのようなものとして、僕は「行動」を学んだこと――これはギリシアの旅の最も大きい収穫だった。　（9月3日）

その晩をミヤリウス号の甲板上で過ごした。翌日の日記では「来たいときに、いつでも来られる気がする」ので、ギリシアの地を離れるにしても「何の感慨もない」と書いている。そして「得たもの、すべて僕の想像を裏切り、すべて意表をつくものだった」と記している。そのためか逆に「多くのカギ」を与えられたという思いに達したのであった。

そしてその後に予定しているシチリアの旅に向かった。この旅についても行程を簡単に記しておきたい。9月5日の朝にタラントに着き、美術館を訪れたあと、夜8時発のメッシーナ行きの夜行列車に乗り、メッシーナには翌日の朝8時に着く。さらに乗り継いでチェファルーを経て、パレルモには夜8時に着いた。7日と8日の二日間は、このパレルモを拠点にして周辺の教会や美術館を訪れた。9日にはパレルモを発って、アグリジェント、カターニア、シラクサと移動する。この日の移動については10日づけの日記に書いてあるが、それ以降、シチリアでの行動は書かれず、日付は14日に飛び、パリに到着した翌朝のことが書かれている。

さてこのシチリア旅行の日記で注目する部分がある。9月5日のタラントの駅の待合室で書かれた部分で、「ある変化が僕の魂におこる」と記され、それも「夢遊状態」であったからとしている点である。

僕は放心し、自分でない人のように自分をみ、自分や外界を、物憂げに、ぼんやりとながめた。この世のことは、もう、どうでもいいような気持ちであった。それは、道をゆきつくして、それ以上ゆけない人が思わずもらす溜息のようなものだった。諦めではないが、決して未来を向いた気持ちではなかった。僕はそういう状態に閉じこめられていた。ほんとうのところ、僕も、自分でどうしてそうなったのか、よくわからなかったのかもしれない。だが「変化」とは何だろ

うか。それはそのようにして数刻にして成しとげられるものだろうか。そうではない。これはすでに何ヶ月も前から予感され、何度も僕が書いたある徐々たる変化の、最後の決定的な仕上げであった。僕はギリシアを離れて以来、ある無感覚のなかにいた。僕の前には、まだシチリアの旅が残っていた。それはギリシアの旅にくらべて、はるかに、自分の力を要するものだった。ギリシアの旅は贅沢(リュックス)だったが、シチリアはそういうわけにはゆかなかった。しかし、これは現実の一つの象徴だった。僕はギリシアで感じた「運命の克服」という主題を、このシチリアの旅という現実の象徴の前で、「仕事」による集中によって克服するという一つの態度を学んだ。シチリアの旅は僕を畏怖させつづけた。これは肉体的に僕を圧倒した。にもかかわらず、僕はシチリアをめぐらなければならないと思った。それは現実がどのようなものであれ、現実が僕を畏怖させるという関係の、象徴的な等置だった。僕は何もシチリアに畏怖する必要はなかった。しかし現実の象徴として、シチリアはそのように現われ、僕はシチリアを克服することによって現実をも克服するという関係に置かれた。僕はギリシアとシチリアの間で、そのような魂のドラマを経験しなければならなかった。「現実」は僕らを畏怖させる。しかし僕らはそれを克服しなければならない。それは古代ギリシア人が運命を担ったように、そうしなければならない。

（9月5日）

繰り返すが、シチリアの旅の始まる前でタラント駅の待合室での記述である。旅はまだ始まってはいない。にもかかわらず、「シチリアの旅」が畏怖させた原因は何か。

徐々なる変化の果ての「仕上げ」だという。シチリアの旅がその「仕上げ」に他ならない。アクロポリスのパルテノン神殿が、美の具現化されたものの象徴であることはすでに確認した。それは人間の領域を示す、強い意志を表現したものであった。これを辻邦生は啓示のごとく受け止めた。だからギリシアの旅は辻邦生にとって、彼自身が望むべき、しかも手に入れるべき主観世界の象徴である。その意味では期待通りの旅であり、「贅沢(リュクス)」であった。シチリアの旅を「現実の一つの象徴」だと辻邦生は書いている。これはギリシアの旅とはおよそ比べものにならぬと予感しているからであろう。事実、日記には一年前のイタリア旅行のときのような発見は記されてはいない。訪れたところを記録にとどめるだけで、その地のできごとや風物から思索に展開するような書き方はいっさいない。佐保子夫人のビザンチン美術研究のための旅行であったのかもしれない。たとえ意にそぐわぬ旅であっても辻邦生はこのように位置づけてシチリアをめぐったのである。そしてこのことは初めての小説のテーマともなり、実際に小説を書いたのである。

（以下次号）

（2000.1.6　受理）